

# 中村星湖〈他們起舞〉論

## —以星湖談及國木田獨步的作品進行探討—

王憶雲

臺灣大學日本語文學系副教授

### 摘要

〈他們起舞〉是中村星湖的短篇小說代表作之一，刊載於雜誌《太陽》大正5年9月號。這部小說主要描繪日本明治時期代表作家國木田獨步的臨終，包含多位文壇人士前往探病的情景。小說的題材是中村星湖的自身經驗，雖然文本中並未敘明實際人物的名字，但一直以來被卻視為紀錄當時因獨步臨終而聚在南湖院的人們(包括田山花袋、小栗風葉、真山青果、中村星湖等眾多文學家)的文字，因此本篇可說是「影射小說」。

本論文探討了兩個問題：首先是關於〈他們起舞〉作為影射小說的特殊性。其次，則是探討〈他們起舞〉此作對星湖的重要性，也同時試著解答國木田獨步之於星湖的意義。方法上，本論文將聚焦於星湖於昭和9年(1934)前後以獨步為題的評論，以及山梨縣立文學館收藏的未發表手稿(包括「國木田獨步其事」2件、「追憶國木田獨步」1件)。藉由考察星湖各篇關於獨步的論述，以及該論述被書寫的時代背景，加上星湖何以撰寫如此大量的獨步相關評論後，本論文希望能夠整理出星湖這些言論的文學史意義。

關鍵詞：中村星湖、國木田獨步、〈他們起舞〉、影射小說、草稿研究

受理日期：2024年03月05日

通過日期：2024年05月24日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202406\_(42).0010

**A Study on Nakamura Seiko's “*They Dance*”  
from his Discussion on Kunikida Doppo**

Wang, Yi-yun

Associate Professor, National Taiwan University, Taiwan

Abstract

Among Nakamura Seiko's short stories is “*They Dance*”, which was published in *Taiyo* in September 1916. This novel is a Roman à clef describing his own experience of visiting Kunikida Doppo, a leading writer of the Meiji era. Although the text does not mention the names of any real people, it has been regarded as one of the discourses that convey aspects of the people who gathered at the deathbed of Doppo (including Tayama Katai, Oguri Fuyo, Mayama Seika, Nakamura Seiko and many others). This article discusses two matters. First, the peculiarity of *They Dance* as a Roman à clef. Second, it argues that *They Dance* was a novel that occupied an important position for Seiko's literary works. In order to clarify these matters, we take up Seiko's critiques of Doppo around 1934, as well as unintroduced and unpublished drafts in the collection of the Yamanashi Prefectural Museum of Literature. After considering the historical background of the time in which each discourse was written, we hope to discover the literary historical significance of Seiko's discourses.

Keywords: Nakamura Seiko, Kunikida Doppo, *They Dance*, Roman à clef,  
Research on the Drafts

# 中村星湖「彼等は踊る」論 —独歩に関する言説を手がかりに—

王憶雲

台湾大学日本語文学系准教授

## 要旨

中村星湖の短篇小説の中に、大正5年9月『太陽』に掲載された「彼等は踊る」がある。この小説は明治時代の代表作家国木田独歩を見舞った自らの経験を描くモデル小説である。テキストには実在人物の名前が記されているわけではないが、独歩の臨終の場に集う人々（田山花袋・小栗風葉・真山青果・中村星湖ら多数）の一面を伝える言説の一つとして見なされてきた。本稿は二つの事柄を論じている。まず、「彼等は踊る」のモデル小説としての特殊性についてである。次に、小説「彼等は踊る」が星湖にとって重要な位置を占める作品であったことを論じる。そこから、更に独歩の存在が星湖にとってどのような重みを持つものであったのかを考察する。これらのことを明らかにするために、昭和9年頃に星湖が独歩について語った評論や、山梨県立文学館に所蔵される未紹介・未刊行の草稿（「国木田独歩のこと」2件、「国木田独歩の追憶」1件）を取り上げる。それぞれの言説が書かれた時代背景にも考察を加えた上で、星湖の言動に文学史的な意義を見出したい。

キーワード：中村星湖、国木田独歩、「彼等は踊る」、モデル小説、  
草稿研究

# 中村星湖「彼等は踊る」論 —独歩に関する言説を手がかりに—

王憶雲

台湾大学日本語文学系准教授

## 1. 中村星湖「彼等は踊る」と田山花袋『東京の三十年』

中村星湖（1884-1974）は明治 37 年早稲田大学英文科に入学し、在学中から『新小説』や『早稲田文学』などの懸賞小説に当選して華やかに作家デビューを果たした。その後、第一短篇集『半生』（早稲田文学社、明 41.12）、第二短篇集『星湖集』（東雲堂、明 43.4）や長篇小説『影』（今古堂、明 43.10）を次々と刊行し、新進自然主義作家として脚光を浴びていた。大正時代に入っても勢いは衰えず、大正 2 年 8 月に第三短篇集『漂泊』（春陽堂）、大正 3 年 10 月に第四短篇集『女のなか』（早稲田文学社）、大正 8 年 7 月に第五短篇集『失はれた指環』（天佑社）などを発表している。今でこそ文学者として顧みられることは少なくなったが、同時代の評論家中村孤月は、「現実味を最も多く有つて居る点に於いて、星湖氏の創作は今の文壇に特異の地位を占めて居り、特異の地位を占める可き価値を有つて居る<sup>1</sup>」と高く評価している。また、紅野敏郎は次のように星湖の文学生涯をまとめている。

ローカル・カラーの横溢した「少年行」によって文壇に登場、彼を認めた二葉亭四迷や島村抱月を敬愛しつつ、『早稲田文学』の実質的な推進者となりながらも、その作風は地味にして堅実。時代の壁を打破するような破壊力こそなかったが、その温厚な人柄は、奇癖や我執にとらわれがちな文学者のなかでは、耐える力を持った長距離選手として堅実に前進、文学者らしい文学

---

<sup>1</sup> 中村孤月「中村星湖論」（『現代作家論』磯部甲陽堂、大 4.7）。引用は『明治文学全集 水野葉舟・中村星湖・三島霜川・上司小剣集』（筑摩書房、昭 44.5）による。374 頁。

者の典型的存在とってよからう。<sup>2</sup>

中村星湖の生涯は長く、小説や評論にわたる膨大な量の作品を残している。しかし、この作家を取り上げる先行研究は少なく、自然主義作家の中でも星湖研究は未開拓の領域にあると言っても過言ではない。この小論は星湖研究への一端を担おうとするものであると同時に、この作家の存在を見逃してはならないという見解を述べるものである。

星湖が残した短篇小説の中に、大正5年9月『太陽』「秋季大付録」に掲載された「彼等は踊る」がある。この小説は、いわゆるモデル小説の性質を持つ代表的な作品であると同時に、星湖の文学生涯においても特別な意味を持つ作品である。星湖にとってどのような特別な意味を持つのかは後述するとして、まずモデル小説としての側面に着目して説明を加えたい。

若くして上京した田山花袋が自らの文学的成功体験を記した『東京の三十年』（博文館、大6.6）には、「独歩の死」という章がある。その章で花袋は茅ヶ崎で療養中の国木田独歩を見舞った折のことを描いており、星湖の小説について次のように触れている。

此処で、その時のことを、中村星湖氏の書いた、『かれ等は踊る』の真相を解そうとするには、私は少し深く入って話さなければならぬ。その時分、小栗君の周囲に、いわゆる戸塚党なるものがあつた。思うに、小栗君は、この新機運勃興の時代に際して、その勢力と位置とを墮さないために苦しんだであらう。<sup>3</sup>

上記の引用内容を検討する前に、まず少し独歩という文学者を紹介しておかねばならない。独歩は、明治4年生まれの小説家・詩人・編集者である。職を転々としながら詩や随筆などを執筆していたが、原稿の売れは芳しくなく、生活は長らく不安定だった。ようやく安定の様子を呈したのは、明治36年、『近事画報』などを発行する敬業社（のちの近事画報社）に入ってからのことである。独歩は同社

<sup>2</sup> 紅野敏郎「まえがき」『精選中村星湖集』（早稲田大学出版部、平10.11）i頁。

<sup>3</sup> 引用は岩波文庫版『東京の三十年』（岩波書店、平19.8）による。217頁。

で多くの雑誌を創刊し、それらの編集長としても活躍した。日露戦争後、近事画報社の経営が悪化した際には、独歩が社を引き継ぐ形で独歩社を創設し、経営者として雑誌の発行を続けたが、明治40年には破産した。この頃から明治39年夏に発病した結核が悪化し、明治41年2月に茅ヶ崎にある結核療養所「南湖院」に入院したが、同年6月23日、36歳の若さでこの世を去った。

独歩の最期を語る時に、しばしば取り上げられる写真がある。それは当時博文館で編集を担当していた花袋が、出版社の写真部のカメラマンを連れて南湖院に赴き、撮ったものである。独歩を囲むのは、田山花袋と前田晁の他、岩野泡鳴・正宗白鳥・中村星湖・相馬御風・吉江孤雁・小杉未醒・小栗風葉・真山青果といった、そうそうたる顔ぶれである。花袋はこの写真を、「さまざまの記念の残ったあの写真<sup>4</sup>」と述べている。



当時の花袋は、自然主義の旗手としてすでに名を馳せており、かつて独歩と同棲生活をしていた親友でもあった。それに対して、写真の最前列で立膝をしている星湖は未だ若手の作家であり、独歩とは初対面であった。花袋は「独歩の死」において前述の箇所以外に、星湖「彼等は踊る」をもう一回挙げている。この写真を撮る様子を描く箇所である。

その病室の入口のところで、国木田君を真中にして、大勢して撮影した写真がある。その時の状態は、『かれ等は踊る』の中にも書いてあるが、あれは私と前田君が、一度国木田君を撮影して置こうと言って、そして社の写真部の人を伴って、わざわざ出かけて行ったのであった。<sup>5</sup>

<sup>4</sup> 注3 掲書、219頁。

<sup>5</sup> 注3 掲書、219頁。

以上の花袋の記述から、「彼等は踊る」は国木田独歩の亡くなる直前の出来事を描いた作品であることは想像に難くない。しかし、実際の作品には、独歩や花袋のような実在人物の名前はいっさい出ておらず、「自然主義運動の先駆者の一人」である文学者田淵一樹の臨終のことを、語り手の「私」が物語の書かれる現在から回想風に語るものである。それに対して、花袋は『東京の三十年』の中で、小説「彼等は踊る」を引用し、実際その場にいた一人として親友の独歩に深い思いを寄せながら、小説の情報をあたかも補完するかのよう独歩の死を語っていた。かくして、花袋の語りでは、回想録と小説とのジャンルの境界が消滅し、「彼等は踊る」の情報が事実として援用されているのである。これは「彼等は踊る」が小説であるにもかかわらず独歩の死を記録した先行の言説として存在の重みをもつものであることを物語っている<sup>6</sup>。またその当時は、〈モデル小説〉の物語内容を事実として受け取ることが可能であったことを証明している。

## 2. モデル小説としての「彼等は踊る」

なぜ当時の国木田独歩の臨終にこれほど多くの文学者が集まったのか。この問題は花袋が「深く入って話さなければならない」と述べる理由に関連する。ここから少し考察していきたい。

現在、日本の自然主義は、島崎藤村『破戒』（上田屋、明 39.7）の出版と田山花袋「蒲団」（『新小説』明 40.9）の発表に眼目を置いて論じられることが多い。しかし、当時流行の兆しをみせていた自然主義の代表的作家の一人として独歩を数える見方は、早くからあった。その一例として、花袋の「明治小説内容発達史」をここに引用

---

<sup>6</sup> 黒岩比佐子『編集者国木田独歩の時代』（角川学芸出版、平 19.12）には、「前日、見舞いに来て夜は茅ヶ崎館に泊まった中村星湖が、入院中の独歩とその友人のことを「彼等は踊る」という小説に書いている。登場人物の名前は変えてあるが、モデルは明らかで、田山花袋が『東京の三十年』でこの「彼等は踊る」を挙げて、戸塚党との対立について述べているのを見ても書かれた内容は事実に近いものと考えていいだろう」とある。312頁。

してみよう。

『破戒』と共に自然主義の勝利の功を分つたものは国木田独歩の『運命』であるが、独歩には既に三十四年に『武蔵野』があり、三十八年に『独歩集』があつた。彼の到達点も同じく叙情詩人としてであつたが、特に推奨すべきは彼が徹頭徹尾独創的の作家だつたことである。〔中略〕凡ての人に対し周囲に対して、何よりもまづ自家の真心直情を推し、所謂習俗や道徳には累はされまいとした実行家であつて、同時にまた一面には、客観的な芸術家風の態度もあつた。<sup>7</sup>

独歩の文学的な出発は詩人としてであり、彼には既存の道徳や価値観からの束縛を受けない実践者でもあつたという。それは日本の自然主義が謳う信条と一致していると花袋は見ている。また、彼の小説集『独歩集』（近事画報社、明 37.8）や『運命』（左久良書房、明 39.3）などは、藤村の『破戒』が世に出て以降、改めて世の注目を浴びることになる。花袋はこのことを『東京の三十年』に「国木田君の『独歩集』も漸く世に認められて再版三版の好況を呈した。「ようやく我々の時代になって来そうぞ。」こう国木田君は笑いながら言つた<sup>8</sup>」と記している。

かくして独歩は自然主義の風潮とともに再評価されたものの、肺結核によってこの世を去ることになる。『東京の三十年』によると、独歩が亡くなる直前に、小説家小栗風葉の一門、いわゆる「戸塚党」の面々が、独歩を自分の勢力に引き入れようと動いていたという。

明治 41 年 5 月、小栗風葉の弟子である真山青果は、入院中の独歩を初めて訪問する。その後、青果は独歩を看病するようになり、その様子を『読売新聞』に連載していた。この連載は独歩の死後に出版された『病牀録』（新潮社、明 41.7）に、附録「国木田独歩氏の病状を報ずるの書」として収められている。このことは、「実際国木田

<sup>7</sup> 引用は徳田秋声・田山花袋・島村抱月『明治大正文学史集成 6 明治小説文章変遷史 明治小説内容発達史 明治文学変遷史講話』（日本図書センター、昭 57.11）による。105-106 頁。

<sup>8</sup> 注 3 掲書、206 頁。

君を崇拜してか、それとも広告的にこの垂死の病人をつかおうとしたか、それは何方だか知らない<sup>9</sup>」と花袋が疑うほどであり、当時の独歩の存在がいかに大きかったかを物語っていると言える。その当時、文壇に登場したばかりであった青果が独歩を献身的に看病する様子は、師と仰ぐかのようなものである。先述の通り、中村星湖もその当時、早稲田出身の新人作家として独歩に接していたのである。星湖が独歩に対して抱いていた感情は、青果のそれに似たものであったに違いない。

前述したように、『東京の三十年』では、独歩らの実名が記されているのに対し、「彼等は踊る」では架空の人物名に置き換えられている。「彼等は踊る」は短篇でありながら、新人作家の森島、「私」の同僚の細井、「私」の友人の松岡、松岡の先輩の丹沢、画家の鈴木、硯友社派の松本などの多くの人物が次々と登場する。小説の冒頭部分を以下に引用する。

田淵一樹といへば、『あゝ、あの四十を幾つも越さずに病気で死んだ小説家か』と明治末期の文学に心を寄せてゐる人は直ぐに合点するであらう。自然主義運動の先駆者の一人であつた彼の芸術の人格に就いては最早世に定評がある。定評を下しても好いまでに、彼の死後の年月を経過した。

語り手はまず、田淵一樹に関する情報として明治末期、自然主義運動という特定の時期と思潮を挙げる。語りの現在は、田淵一樹の死からある程度の年月を経た時点に設定されており、その時点で田淵に対する評価が定まっていたとする。物語の外部情報を照らし合わせると、星湖がこの小説を発表したのは明治41年の出来事から8年経った大正5年のことであり、すでに定着していた独歩に対するイメージを物語の読者に想起させようとしたと見てよからう。ただし、そのイメージを喚起するには読者の文学知識を要求するため、田淵一樹を国木田独歩と結び付けられぬまま読まれる可能性はもちろん

---

<sup>9</sup> 注3 掲書、217頁。

ないと言いきれない。物語外部の情報と関連づけられないまま、完全なる虚構の物語として「彼等は踊る」を読むことも可能である。しかし、「明治末期の文学に心を寄せてゐる人」を対象にして、実名を使わない星湖の語りがうまく機能したのは、読者がモデル小説慣れをしていたという時代的な背景と関連しているであろう。作者が物語内部に実名を使わないのは、読者に物語外部の情報を考えずに読んでほしいからではない。一見したところ矛盾に満ちた手法を取ることにこそ、「彼等は踊る」が特別な存在である理由がある。

とはいえ、厳密に物語の冒頭を見ると、「明治末期の文学」という範囲は曖昧で、「定評を下しても好いまでに、彼の死後の年月を経過した」という時間感覚も、語り手が想定した時間に過ぎない。テキストの外部では時間が止まることなく流れているのである。明治文学に関する知識を少しも持たない読者は、この作品の発表以来、時代が下るほど増えてきたといえるだろう。もちろん、テキスト論においては、作者の意図と作品内容を別個のものと見ることができる。しかし、作者の星湖はこのような現実に対して、すなわちテキスト論的な読み方に対して抵抗しようとして行動を取った。次章において、物語外部の情報の一つとして、中村星湖自らが「彼等は踊る」を語る草稿を取り上げ、論を進めたい。

### 3. 山梨県立文学館所蔵「国木田独歩のこと」草稿」二点

星湖には個人の全集がなく、単行本に所収されていない作品は初出に当たるしかない。紅野敏郎編集『精選中村星湖集』（早稲田大学出版部、平 10.11）があるが、小説を中心に収録されている。その「まえがき」において紅野は「今後さらに単行本未収の評論やエッセイを集めた一巻を作る必要あり、と思っている。「資料と研究」において、星湖自身がスクラップした同時代発言を現在整理中、これが完了した段階で実行に移すつもりである<sup>10</sup>」と述べており、評論関係

---

<sup>10</sup> 注 2 掲論、iv 頁。

の資料が揃っていないことを課題として指摘している。『資料と研究』とは山梨県立文学館が刊行する研究紀要のことで、第1号(平8.3)から中村星湖作成のスクラップブックの調査報告が連載されている。2024年1月の時点でいまだ継続中であるが、全26冊のスクラップブックの最終冊にまで到達しており(第28号、「中村星湖作成スクラップブック(26)(その三)」、「二十九年を経てようやくゴールが見えてき」ているという<sup>11</sup>。ただし、紅野敏郎が目標として掲げていた、「単行本未収の評論やエッセイを集めた一巻」の出版にまでは至っていない。

独歩を取り上げた星湖の評論のうち、「彼等は踊る」と時期的に近いものとして、大正8年6月号『文章世界』に発表された「独歩について」が挙げられる。独歩を扱った小特集の一篇であり、他の執筆者に赤木桁平・田山花袋・片上伸がいる。星湖は冒頭に次のように述べている。

私は独歩にはたゞ一度逢つた切りである、それも彼が死ぬ一週間前位ゐの、極きはどい時にだつた。今度はとても駄目らしいといふ噂を聞いて、相馬御風君と私とで、早稲田文学社を代表して見舞ひに行つた、それが初見参でもありお別れでもあつた。星湖は独歩と一度しか会っていない。「彼等は踊る」の設定はこの事実をそのまま踏まえている。また、小説の語り手の園田が働く雑誌社は早稲田文学社を、園田に同行した同僚の細井は相馬御風をそれぞれモデルとしたものである。このように、大正8年の短い回想文に語られる事実を「彼等は踊る」の描写と照合すれば、小説の設定が事実即したものであることは明白だが、その中には星湖の個人的な述懐も見られる。星湖は病床に伏した独歩の心情を深く理解しないまま見舞ひに行つたことを後悔して、「あの頃の私は、何といふ勝手な、やくざな若者だつたらう！」と綴っている。また、当時の自らの未熟さを顧みながら、改めて独歩の作品を読み直すと、「清朗

---

<sup>11</sup> 山形敏貴「編集後記」(『資料と研究』28、令5.3)111頁。

透徹して微翳だにない珠玉のやうな気がする」上に、「彼の生活は世間で思つてゐるより以上に複雑でもあ」と指摘している。この点から、星湖がこの回想で特に述べたかった事柄の一つとして、文学者における作品と実生活との乖離が挙げられる。それは「彼等は踊る」に見られる田淵一樹のイメージに共通している。ただし、この「独歩について」は、「彼等は踊る」より後の回想だが、「彼等は踊る」に関しては一言も触れていない<sup>12</sup>。

星湖が「彼等は踊る」に触れたものとして、山梨県立文学館所蔵の「「国木田独歩のこと」草稿」(230000802)と「「国木田独歩のこと」草稿」(230001720)がある<sup>13</sup>。山梨県立文学館には星湖の長男顕一氏から多くの原稿や書簡が寄託されている。この2点とも未発表未完の草稿で、タイトルこそ同じではあるが、内容は異なっている。ここでは前者を「国木田独歩のこと(A)」、後者を「国木田独歩のこと(B)」として、それぞれ紹介したい。

では、まず「国木田独歩のこと(A)」についてである。4百字詰め原稿用紙(26.0×36.0cm)5枚、副題には「自作小説『彼等は踊る』の部分的抄出と注釈」とある。「はしがき」の冒頭に、この文章を書くきっかけを次のように述べている。

これは法政大学工業高等学校の「紀要」第六号に、今年が同校創立十周年に当たるとかで、何か随筆風の物でも寄稿するようにと、「紀要」編集部からの連絡が、八月初め頃あった。

「法政大学工業高等学校」とは神奈川県川崎市中原区木月大町にあった工業高校のことであるが、昭和51年、法政大学第二高等学校に吸収・合併され、現存していない。ここにいう「同校創立十周年」に相当する「今年」とは昭和44年度のことを指す。これに続けて星湖は同校の所在地川崎には、自身が建設に深く関わった国木田独歩

---

<sup>12</sup> 自らが書いた、独歩をモデルにした小説には触れていないが、独歩と交友関係がそれほど密接ではない星湖が『文章世界』の独歩の小特集に執筆を頼まれたのは、「彼等は踊る」を書いたことがその理由の一つではないかと思われる。

<sup>13</sup> 本稿で取り上げる山梨県立文学館所蔵の中村星湖資料は、資料名の後に館によって付された資料コードを示した。

の記念碑があることに触れる。この記念碑とは、昭和9年夏に、「溝ノ口亀屋の前庭に島崎藤村先生の題字をもって、私が碑文を書いた」もので、現在は川崎市立高津図書館の前に移されている。星湖は独歩の記念碑建立の経緯に続けて、次のように語る。

私がずっと若かった頃、相馬御風君と一緒に、茅ヶ崎南湖院に病氣療養中独歩を訪問した事がある、その後、間もなく独歩は死んだのだつたが、その前後の事を私は小説に書いて、大正五年頃の雑誌「太陽」に載せた。

この小説とは、言うまでもなく「彼等は踊る」のことである。星湖はその小説の「切抜き」を保管していたが、第二次世界大戦時の疎開により行方不明になってしまったらしい。しかし、不思議なことに「「紀要」寄稿の要求が法政附属高工からあつた頃に、つい枕もとの戸棚の雑書の中から現れ」てきたという。そこで星湖は、「主人公の独歩を始めいろんな当時の作家や、画家の実名を、仮名にして置いたのを、せめて本名、実名に書き換えたり、注釈の必要な箇所には注釈を加えて」、それを「紀要」に寄稿しようと試みたという。以上のような原稿執筆の経緯に続けて、星湖は独歩の略伝を事典から引用し、自身の小説を冒頭から書き写し始めている。しかし、原稿用紙5枚目に入って、「類例を西洋に求めるならば、ウォーズウォースカツルゲーネフのよう」という最初の一段の途中で、中絶してしまっている。

次に「国木田独歩のこと（B）」についてである。「国木田独歩のこと（A）」と同様の4百字詰め原稿用紙（26.0×36.0cm）4枚に書かれている。副題には「自作小説『彼等は踊る』の注釈」とある。「まえ書き」の冒頭に「彼等は踊る」についての次のような説明がある。

私は若い頃、国木田独歩に就いて、新聞や雑誌から求められるまゝ、評論、小説、随筆などの形で書き散らした事が幾度かあつた。その中で、一番自分の気に入った物で、多少世評にも上つたし、明治末期の有名な文壇人で、殊に独歩と親交のあつた田山花袋の「近代の小説」にも言及されてあるのは、独歩がま

さに亡くならうとする頃の茅ヶ崎南湖院附近を舞台とした短篇小説「彼等は踊る」だった。

星湖は、自身の独歩に関する著作のうち、「彼等は踊る」を最も気に入っていると述べている。「国木田独歩のこと（A）」と同様に、故郷への疎開によって『太陽』の切り抜きが失われたこと、そして時を経て見つかったことを述べている。しかし、ここでは切り抜きはその後再び行方知れずとなり、そのまま 20 年程が経ったということになっている。そして、この 20 年間の星湖自身の生活をかなり詳しく紹介している。順を追って簡単にまとめると、疎開先の故郷で他の家族と「棟割長屋式の割居生活」をしていたこと、戦後も星湖夫妻はその「祖先伝来の田舎家」に残り「百姓の真似事」をして過ごしていたこと、妻まさじの没後、三男家族と一緒に 10 年程暮らしていたが、教育上の理由で星湖を残し再び東京へ戻ったことが記されている。そして、三男家族が東京へ戻った後、星湖は自分の物を整理しようとしたという。

私の家財や諸道具や書籍類で、三男の下宿または新居の方へ、意識的に、或いは無意識的に運ばれた物もあつたらしい。／あとで書物戸棚の大きなのを二つ造らせて、火事か台風にでも荒らされたような、新古の書物類、原稿類を整理してみたが、二十年前は自駄落に放つて置いたのでとても十分な整理は付かなかつた。

ここまでで、この草稿も中絶している。つまり、「切り抜き」が見つかったか否かはわからないまま、そして、「彼等は踊る」の説明や注釈に入らないまま終わっているのである。

それでは、この草稿 2 点から明らかになることを簡単にまとめたい。まず、「彼等は踊る」は星湖にとって特別な意味を持つ作品であるということである。切り抜きの行方を気にかける星湖の様子がそれを物語っている。そして、2 点とも未完に終わっているが、何とかしてこの作品に注釈を付け、再び世に送り出そうとしていることも、星湖の思い入れの強さを表している。

次に、この2点の草稿が比較的に近い時期に書かれたものであることに着目したい。「国木田独歩のこと（A）」に執筆のきっかけとして挙げられている『法政大学工業高等学校紀要』の寄稿依頼が来たのは、昭和44年8月のことと思われる。それは、『法政大学工業高等学校紀要』創立10周年記念号（第6号）が昭和45年3月に発行されているためである<sup>14</sup>。それに対し、「国木田独歩のこと（B）」は、妻まさじの逝去（昭和32年3月13日）後、10年にわたった三男家族との共同生活が解消された後に筆を執ったものであることから、昭和42年以降に書かれたと推測できる。このように見ると、2点の草稿は、いずれも昭和40年代前半に書かれたものであり、その頃の星湖の思いが反映されていると言える。ただし、記念号巻頭には星湖の文章が掲載されてはいるものの、独歩とも「彼等は踊る」ともまったく無関係な内容の「湘南雑記」という短い随筆である<sup>15</sup>。

最終的に、星湖の「彼等は踊る」の注釈は計画の途中で断念してしまったようである。『法政大学工業高等学校紀要』編集部が何字程度の原稿を依頼したのかは明確ではないが、星湖が実際に寄稿した「湘南雑記」は2000字に満たない小編である。星湖はこの程度の分量では、書きたい事柄を書き切れないと判断するに至ったのではないかとと思われる。

実現には至らなかったものの、この2点の草稿から文学者独歩と「彼等は踊る」が、星湖にとって非常に重要なものであることがわかる。また、ここで特に注目したいのは、星湖が注釈を施そうとした行為についてである。「彼等は踊る」というテキストは、発表からおおよそ50年経った昭和40年代前半においては、物語外部の情報がないと正確に読まれないという星湖の判断がここにあったのでは

---

<sup>14</sup> 昭和34年、法政大学第二工業高等学校は全日制工業課程を併設した。「創立」とはそのことを指す。

<sup>15</sup> 星湖の長男頭一氏は昭和44年1月から法政第二工業高等学校の校長になり、同47年に法政大学工学部長に選ばれる。その繋がりでも『法政大学工業高等学校紀要』の編集が星湖に寄稿を依頼したのであろう。法政大学百年史編纂委員会編『法政大学百年史』（法政大学、昭55.12）571、902頁を参照。

あるまいか。テキストの空白を埋め、昭和後期の読者にも大正時代の読者共同体が持っていた知識を与えようという意欲がここに見て取れる。このような星湖の行動から、モデル小説が成立しうるのはその時代の読者層の特殊性と関わっていることを改めて確認することができよう。テキストをその時代の〈共有知識〉の文脈に置いて読むことは、極めて重要なことなのである。

#### 4. 独歩を語り続ける星湖

前述したように、「彼等は踊る」と時期的に近い星湖の評論として、大正8年6月に発表した「独歩について」(『文章世界』)がある。では、昭和期以降の星湖は独歩に関してどのような評論を発表したかを見ていく。

紅野敏郎編「中村星湖年譜」<sup>16</sup>によると、昭和期に星湖が発表した独歩に関する評論には、次のようなものがある。「詩人独歩と語る」(『報知新聞』昭2.4.26-5.5)、「国木田独歩」(『日本文学講座第十一卷』改造社、昭9.1)、「独歩記念碑」(『山梨日日新聞』昭9.7.4)、「国木田独歩とその頃の文壇」(『秋田魁新報』昭9.9.27-28)、「国木田独歩論」(『弘文』昭9.12)などである。『弘文』に掲載された一点だけは未見であるが、山梨県立文学館所蔵の星湖関係資料を調査すると、年譜にない「国木田独歩の追憶」原稿(230001336)が確認された。これは東京中央放送のラジオ放送のために書いた原稿だと思われる<sup>17</sup>。

雑誌や新聞が文学者を追悼したり記念特集を組んだりして特定の文学者を取り上げるのは、その文学者が社会において一定の地位を占めていることを意味する。メディアを通して他界した文学者を記念しようとする動きは、明治以来のジャーナリズムの発達とも関連している。関わりのある人が執筆依頼を受け、故人を語ることは文

<sup>16</sup> 注2掲書、417-465頁。

<sup>17</sup> この原稿の表題の横に「七月三十日午後六時二十五分より五十五分迄」「東京中央放送局にて放送」と記されている。記念碑建設の経緯を記した内容から推定すると、昭和9年のものであることがわかる。

学者のイメージの形成に寄与することとなる。それにより文壇という共同体の結束もより強まる。ただし、このような状況は、世を去った直後にしばしば見られるが、時間の流れとともにその存在が忘れられることは避けられない。この忘却に抗うには、再び誰かが語り出すことが有効的な方法の一つである。また、記念碑の建設や文学館の開設も大きな効果をもたらす。

昭和期に星湖が独歩について語る作品のほとんどが昭和9年に集中しているのは、川崎に独歩の記念碑を建立したことがきっかけとなっていると思われる。建設の経緯について前述の「独歩記念碑」で星湖は次のように述べている。

神奈川県高津町溝ノ口は、多摩川二子の渡しの近くにある小さな部落だが、農民劇の事で、私は、そこに幾人かの同志を持つてゐる。かれらのうち二三の者が、国木田独歩記念碑建立を企て、その題字について、私に相談があつたので、島崎藤村先生に紹介してやつた。七月末頃、建碑式を挙げる筈である。

前述したように、記念碑の表の題字は島崎藤村が揮毫したが、裏にある記念碑設立の経緯は星湖が書いたものである。碑がこの場所に建てられたのは、亀屋が独歩「忘れえぬ人々」(『国民の友』明31.4)の舞台上、その主人鈴木慶蔵が小説の中の吉蔵のモデルであったというゆかりがあるためである。『秋田魁新報』に掲載された「国木田独歩とその頃の文壇」においても星湖は建設の経緯をさらに詳しく書き表しながら、独歩を見舞った際に受けた強い印象や、独歩と自然主義運動との関連についても触れている<sup>18</sup>。

ここでさらに「国木田独歩の追憶」の原稿(230001336)に注目

---

<sup>18</sup> 星湖は「去る七月二十三日、独歩の二十七年忌を機会に有志の人々の手で溝の口に独歩が好んで逍遥したところで、この村に亀屋といふ雑貨を商ふ家があるが、その家族達ともいつか懇意になり、この亀屋の人々をモデルに小説も書いてゐる〔中略〕この記念碑は文壇人が立てたのではなく、すべて独歩を愛する村の青年達が、独歩の生前、この村と交渉があつたといふだけのことで、お互に金を出し合い、寄付を集めて自分達の手でつくつたものである」と述べている。記念碑を立てたことは村の青年たちの意思にあったことを強調している。中村星湖「国木田独歩とその頃の文壇」(『秋田魁新報』昭9.9.27-28)。

したい。この原稿でも独歩の記念碑建設の件から語りは始めているが、モデル小説に関しての言及もある。亀屋が「忘れえぬ人々」という作品の舞台で、「亀屋の老人とその孫とは独歩の小説のモデルとなった」と星湖は説明し、文学史的観点から次のように述べている。

新しい写実主義もしくは自然主義の文学が我が国に盛んになって以来文学芸術といふ物は架空なこしらへ物といふ観念は全然一掃されたと言へないまでも、さういふ考がよほど薄くなり、文学芸術の作品には、多くの場合、モデルがある、作中人物に相当する実在の人物が何かしらあるやうになり、その事が屢々、作者やモデルの実際生活に関係を持つて、面白からぬ悶着を引起こしたり、それまで仲の善かつた友達同志が仲違ひになるといふやうな例が珍しくありませんでしたし、今日でもやはり同じやうな悶着が起こり勝ちであります。<sup>19</sup>

星湖は、独歩と彼の周囲にいた文学者をモデルにした「彼等は踊る」のような小説を書いてきた。日本では近代以来、事実を重視する文学傾向が起こり、モデル小説がよく見られるようになるが、それとともに小説作品の公表によって実在人物の実生活にまで波紋が広がることがあった。独歩の小説を例として論じる星湖はこのような状況を把握して簡潔にまとめている。自然主義の傘下で文学活動を開始し、大正時代の私小説の流行に際しても第一線に立ち続けた作家だけのことはある<sup>20</sup>。

ここまで述べてきたように、昭和9年の星湖は、複数のメディアで記念碑建設の経緯を説明し、独歩という作家を飽きずに語っていた。そして、独歩を「日本の近代文学の開拓者<sup>21</sup>」としてその存在の重みを認めている。さらに、「燎原の火の如き勢ひを以て天下を風靡

<sup>19</sup> 注17掲「国木田独歩の追憶」原稿(230001336)。

<sup>20</sup> なお、明治39年3月に刊行された独歩の短篇集『運命』について、宗像和重は「さまざまな機会にその事実関係やモデルについて言及している」と指摘している。当時の文壇は独歩の小説方法や素材の由来に関して、作者自らの発言を通して理解できていた。宗像和重「解説——純粹無垢の一行」(『運命』岩波書店、令4.1)274頁。

<sup>21</sup> 注18掲「国木田独歩とその頃の文壇」。

した自然主義文学の先頭に「詩人独歩」の青白い顔を置いて眺めることはすこしも怪しくないし、かれの生涯及びかれの作品があつたがために、わが国の自然主義運動が一段の光彩を放った<sup>22</sup>」と日本自然主義運動の先駆者としてとらえているのである。独歩の臨終に立ち会った経験にも繋がる深い感情は、「彼等は踊る」だけでなく、これらの評論の随所に見られる。

ただ、星湖一人の思いだけでは独歩を記念し彼の功績を語る文章が複数のメディアに取り上げられはしなかつただろう。この点を考えるには『日本文学講座第十一巻』（改造社、昭9.1）所収の「国木田独歩」の存在を無視してはならない。『日本文学講座』は改造社が昭和8年に刊行を始めた日本文学の叢書で、11巻は『明治文学篇』として明治文学を取り扱う論文が多く収められている。中には幸田露伴と正宗白鳥が書いた全体の概説がまずあり、次に代表的作家や文学団体をテーマとした論が並んでいる。テーマごとに執筆者が異なっており、森田草平が「赤門派と『帝国文学』」の章を、あるいは徳富蘇峰が「民友社と『国民の友』」の章をとるように、直接にその作家や団体に関係した作家が執筆する形になっている。このような方針の下で、星湖は独歩の紹介に当たっており、星湖は独歩を語る権威として認められている。それと同時に星湖自身も独歩について語る責任を担っていると認識していたに違いない。だからこそ、これほど多くの独歩論を書き記してきたのである。さらには、この当時、『日本文学講座』が編纂されたことがそれを象徴するように、日本の近代文学を理論化する、ないしは前世代の文学を定義するという動きがあつた<sup>23</sup>。また、昭和9年1月からは当時の警保局長の

---

<sup>22</sup> 中村星湖「国木田独歩」（『日本文学講座第十一巻』改造社、昭9.1）247-248頁。

<sup>23</sup> 改造社だけではなく翌年の昭和10年に東京堂が『日本文学全史』の刊行を始めたが、これは一般の読者向けの方針で編集されている。執筆者は佐々木信綱・五十嵐力・吉沢義則・高野辰之・本間久雄の五人である。その広告には「過古三千年の日本文学は、吾が国民精神の最も具体的なる発露であつて、これを検討することは、取りも直さず偉大なる日本民族、優秀なる日本精神の由つて来る所以を闡明することだ」と徳富蘇峰によって記されている。徳富蘇峰「国民必読の書」（『報知新聞』昭10.6.4）。

松本学が文芸懇話会を文壇に提案し、文芸統制を現実化しようとしていた。これらの動きは大正末期から続いており、大正14年3月から昭和2年6月にかけて『早稲田文学』特輯「明治文学号」の編集出版がされている<sup>24</sup>。文壇内部に明治文学を回顧し、理論化する大きな潮流があったのである。星湖が「詩人独歩と語る」(『報知新聞』昭2.4.26-5.5)を書いたのは昭和2年のことで、また同年6月には『早稲田文学』に「自然主義運動の回顧」に寄稿している。このような星湖の活動は時代の潮流と軌を一にしたものである。

## 5. 独歩とその時代の下で踊る文学者

「彼等は踊る」を出発点にし、物語外部にある作者が独歩について語っていたことについて考察をしてきたが、ここからは物語内容に戻って考えたい。

「彼等は踊る」の物語内容は主に三つの出来事にわけることができる。一つ目は、語り手の「私」＝園田が、田淵一樹が重篤であると知らせを受け「××雑誌社」の同僚細井と二人で見舞いに出かけ、病室で田淵と初対面したことである。二つ目は、硯友社派の小説家松本（小栗風葉がモデル）とその弟子たちが病室を訪れた後、園田らを彼らの泊まる宿に連れ帰り、夜には一同で酒を飲んで芸者をあげて大騒ぎしたことである。最後は翌日に田淵の友人や後輩と病院で合流し写真を撮ったことが描かれる。末尾に語り手の園田は当時の出来事を振り返って、次のような感慨を述べている。

田淵氏には人を踊らせ歌はせる力があつた。その事は人の種類には拘らなかつた。／時々、田淵の友人や門下生の間に彼の碑を立てる議が起こつた事を私は聞いた。彼が愛した「武蔵野」の静寂の林間に、多摩川か何かの澄んだ水に臨むあたりに――

---

<sup>24</sup> 合本『明治文学研究』は東京堂より昭和4年に出され、昭和52年にまた春陽堂から復刻本が出された。その内容について「雑誌収録文はおおよそ一二〇篇、すべて明治文学の回想・研究として定評のある貴重な資料」と十川信介は述べている。十川信介「文明開化の伝統―『早稲田文学』明治文学号」(『明治文学回想集(上)』岩波書店、平10.12)335頁。

といふのが彼等の計画らしい。それもよろしい。

ここは小説の表題を解説する重要な手がかりである。〈彼等〉とは田淵の周囲にいる人たちで、〈彼等〉は田淵の影響を受け〈踊る〉わけである。語り手は結びの少し前のところで田淵の親友阿部（田山花袋がモデル）が追悼会でこれからは自然主義でなければならんと演説したことに触れている。その上で自然主義運動は「田淵一樹の死を機会として勃発した」という見解を示しながら、明治40年前後を次のように描いている。

私は勿論、田淵氏一人の死があれだけの騒ぎを惹起したとは思はない。むしろ時代のさうした傾向が彼の死を飾つてやつたと解釈する事の妥当であると思ふ。酔ふ者、踊る者、叫ぶ者、それ等すべては各自に酔ひたいから酔ひ、踊りたいから踊り、叫びたいから叫んだのだ……けれども、あの時死んだのが田淵氏でなくて他の一人であつたならば何うであらう？他の一人であつたならば、そこには全然異なつた光景が現はれなければならない。

田淵一樹の臨終に際して、園田は田淵の周りの人々が酔い、踊り、叫ぶ不思議な様子を目撃した。松本と弟子たちは、園田と細井を病院から連れ出して直ぐに明るい海岸の景色を楽しんでいた。そして宿の庭では「怒号と笑声と拍手」の中で相撲を取り、入浴後には芸者もまじえた宴会を開いた。松本は宴会の始まりに、「今夜は少し酔はうぢやないか？田淵君があゝして病んでゐる事を考へると濟まないうやうな気もするけれど……」と遠慮の様子は見せていたが、画家の鈴木（小杉未醒がモデル）は「あゝ大いに酔ふべし！」、「あの人だつて丈夫の時なら、ステテコ踊り位はやりたい方なんだ」とさえ言い放っている。酔いに乗じて「松本は女の片手を取り」、「それに森島も、今まで黙つて杯を重ねてゐた鈴木も加はつて、四人づれでドタリバタリと踊り出す」という騒ぎになる。最終的に「天井の抜けさうな騒ぎに驚いてか、宿の人達は梯子段の上り口から顔を出して、笑つて帰つて行く者もあり、そのまゝ其所にゐんで見てゐる

者もあつた」というほどであった。彼らは田淵の危篤を悲しみに沈むどころか、むしろ「精力のはけ口」を見つけようと、生の力を発散している、と園田の目には映っている。それは田淵の力強い生き方が周囲の人々に多大な影響を及ぼしたという一面もあるが、時代が自然主義に移行していくことに到底逆らえずにいたのだと園田は回想しているのである。

ではここで再び物語の枠を離れ外部へ出よう。第一章に引用した『東京の三十年』に書かれているように、花袋は自然主義の流行初期に小栗風葉は「その勢力と位置とを墮さないために苦し」み、「垂死の国木田君を自分の勢力圏中に入れて置く」ように動いていたと回想している。当時の花袋は風葉の「軽佻な態度」を不満に思い、風葉と弟子の真山青果らと対立した<sup>25</sup>。独歩が亡くなった後も風葉らは茅ヶ崎館で酒を飲み深夜まで大騒ぎをしており、『読売新聞』の記事になるほどであった。やがて葬式の通夜の席で「酒に酔った青果が花袋を挑発するような暴言を吐き、危うく乱闘になりかけ」たという<sup>26</sup>。

ただし、「彼らは踊る」では、語り手の園田は、見舞いの翌日にすぐ帰京しており、通夜にも参列しなかった。通夜の晩も「皆は踊つたり騒いだり喧嘩をしたりした」ことや、「松本や森島や鈴木だけならばそこに不思議はないのであるが、温厚な阿部氏までが酔って狂ひまはつた」という状況は細井の話によって間接的に語られている。しかし、「彼等は踊る」の内容は『東京の三十年』に記された花袋の観察や感情と必ずしも一致しているわけではない。花袋は風葉一派の所行に批判的な態度を取るのに対して、園田はやや冷静な態度で人物の動きを眺めそれぞれの特徴を捕えようとしている。どちらかというところと中立的立場を取っている<sup>27</sup>。

---

<sup>25</sup> 注3 掲書、217-218頁。

<sup>26</sup> 注6 掲書、318頁。

<sup>27</sup> 独歩の死に立ち会ったものとして、事件に関する花袋の言説に不満を抱いている人がある。中村武羅夫は『明治大正の文学者』（留女書店、昭24.3）で花袋は「一方的立場からだけ書いてある」と批判しており、また星湖の小説に関し

ここで独歩の死の直前に起きた事実を突き止めようとするのは小論の狙いではない。独歩の死にまつわる言説から、これほど多くの文壇人がそれぞれの思惑を抱いており、偉大なる作家の死に少なからず影響を受けたということを強調したい。園田は田淵の作品から様々なことを思い描いて対面を果たすが、最初は気まずい沈黙が続いてしまった。そんな折、田淵の二人の子供が入ってくる。園田は自然に「みつよし」という男の子を膝の上へ抱き上げ、「その父親は死んで行くのだ」と思うと、「つい先刻まで何物かに隔てられてみた二人の間が、急に、近過ぎる程近づいた」ように感じた。一回限りの対面において園田が接近したと感じたことはとても重要である。園田は以前より友人などから聞かされて「鈴木ばかりでなく、田淵氏に愛せられもしくは助けられた青年は数限りなかつた」ということを知っていた。実際の対面の場面でも、田淵は子供を愛するように、田淵が期待を込めて「青年を愛し」ているように園田には感じられたのである。田淵には若い世代の青年らに対する温かい愛情があり、園田には先駆者としての田淵の仕事を継承する意気込みがあったことが見て取れる。

「彼等は踊る」の物語言説は暗い死のイメージではなく、生の方に重きを置いている。病床に臥せる田淵を見た最初の印象も、「瘠せてはゐるが、清げて、朗らかなその顔は、話に聞いた通り、作物で想像した通りで、とても瀕死の人のそれとは思はれなかつた」と記されている。田淵の生涯を語る際にも、「彼は彼の生命の衝動のまゝに余りに激しく狂ほしい恋をもし」、「彼は彼が遺伝された病弱の肉体を打壊さずには置かないやうな放埒な生活をもした」という。

かくして、星湖は自らの体験を物語化し、評論ではなかなか語り得ない個人的感情を語り手の園田に託しながら「彼等は踊る」を書きあげた。3章で述べたことの繰り返しになるが、「彼等は踊る」の発表当時に星湖が想定した読者は、文壇関係者や当時の文学状況に

---

ては「かなり感情的な態度で書いたものである」と述べている。引用は中央公論版、昭44.5、71頁。

一定の理解を持つ人たちである。直接的な関係者が多く含まれるため、紛擾を起こさないように表向きには本名を用いるのを避けつつも、モデル小説に対する読者の理解を頼りにして、実在した文学者の生の姿を描くテキストとなっていた。テキストの成立はこのような特定の読者の存在が欠かせなかったのである。

## 6. 結びに

昭和 28 年 8 月に潮書房より『現代作家処女作集 早稲田作家篇 第 1 集』が青野季吉・谷崎精二の監修で出版された。正宗白鳥・小川未明・中村星湖をはじめとする早稲田出身の作家の短篇の処女作と、その作品に対する著者自身の「処女作回想」が書き下ろしとして収録されている。星湖の処女作『少年行』は長篇であったため、代わりに「町はづれ」(『早稲田文学』明 41.6) を以て星湖はこの企画に応ずる。星湖は回想の中で「町はづれ」が発表されたまさにその頃、南湖院にいる独歩を見舞ったことにふれ、次のように述べている。

これを発表した六月に、私の記憶にして誤りがないならば、国木田独歩、茅ヶ崎南湖院に於て病篤したとの報に接し、当時「早稲田文学」記者だった相馬御風君と私とは、社を代表して独歩の病氣見舞に行つた。そして私はその時独歩と最初の会見をした。(その時の顛末を私は後に『彼等は踊る』と題する作中に詳しく書き込んだ)「今月の早稲田文学が未だ届いてゐない、東京へ帰つたら直ぐ送つてほしい」と独歩に頼まれて、帰ると忘れず送つてあげた。／けれども、それから一週間経つたため独歩は死んだので、私の『町はづれ』もかれの目にふれたかどうかかわからない。<sup>28</sup>

独歩との一回限りの対面を述べる言説としては小論がここまでに取り上げたものと大差はない。ただ、繰り返して話題にのぼせるほど、

---

<sup>28</sup> 中村星湖「処女作の感想」(早稲田文学編集委員会岩城順二郎編『現代作家処女作集 早稲田作家篇 第 1 集』潮書房、昭 28.8) 249-250 頁。

この経験が星湖にとっていかに巨大だったかを示している。独歩を文壇の先駆者として見ていたからこそ自作を送付したのであり、彼の評価を受けたいという若い星湖の気持ちが見て取れる。

前述の「独歩について」(『文章世界』大 8.6) に書かれている「彼の生活は世間で思つてゐるより以上に複雑」だという星湖の感慨は、自らも時代の流れの下で小説や評論を書き、文学者として生活の難しさをも味わい、ようやく独歩臨終の心境に接近したと星湖自身が思い至ったことで自ずと発せられたものだっただろう。星湖は死の迫る独歩の周囲に集まった人々の様相を「彼等は踊る」として上梓した後も、独歩の記念碑建立に関与したり、独歩に関わる原稿を新聞や雑誌に発表したりしていた。小稿は星湖が国木田独歩について語った評論や、小説「彼等は踊る」について語る草稿などを検討しながら、「彼等は踊る」にモデル小説としての特殊性を有することを明らかにした。また、これらの独歩に関する複数の言説を跡付けることによって、自然主義の新進作家として文学生涯を始めて以来、文壇で長く活動してきたからこそ、自然主義や独歩を文学史的に回顧する位置を獲得した星湖の一面も浮上してきた。

本稿では星湖の言説を分析することによって、星湖をはじめとした多くの文学者にとって独歩の存在がいかに大きなものであったかを明らかにしてきた。星湖は明治から昭和にかけての長きにわたって文壇にあり、その行方を注視し続けてきた。確かに、星湖自身には文壇を牽引するほどの影響力があったとは言いがたい。しかしながら、星湖の残した多くの評論や作品は、我々にそれぞれの時代における幅広い視点を提供してくれるのである。このようなことから星湖は文学史の上で決して看過できない作家だと言えるのである。

## テキスト

中村星湖「彼等は踊る」『太陽』大 5.9

中村星湖「独歩について」『文章世界』大 8.6

中村星湖「詩人独歩と語る」『報知新聞』昭 2.4.26-5.5

中村星湖「国木田独歩」『日本文学講座第十一卷』改造社、昭 9.1  
中村星湖「独歩記念碑」『山梨日日新聞』昭 9.7.4  
中村星湖「国木田独歩とその頃の文壇」『秋田魁新報』昭 9.9.27-28  
中村星湖「処女作の感想」『現代作家処女作集 早稲田作家篇 第 1 集』潮書房、昭 28.8  
中村星湖「国木田独歩のこと」草稿」山梨県立文学館蔵、230000802  
中村星湖「国木田独歩の追憶」原稿」山梨県立文学館蔵、230001336  
中村星湖「国木田独歩のこと」草稿」山梨県立文学館蔵、230001720

### 参考文献

黒岩比佐子（2007）『編集者国木田独歩の時代』、東京、角川学芸出版  
紅野敏郎（1998）「まえがき」「中村星湖年譜」『精選中村星湖集』、東京、早稲田大学出版部  
紅野敏郎編（1998）『精選中村星湖集』、東京、早稲田大学出版部  
田山花袋（2007）『東京の三十年』東京、岩波書店  
十川信介（1998）「文明開化の伝統—『早稲田文学』明治文学号」『明治文学回想集（上）』、東京、岩波書店  
徳田秋声・田山花袋・島村抱月（1982）『明治大正文学史集成 6 明治小説文章変遷史 明治小説内容発達史 明治文学変遷史講話』、東京、日本図書センター  
徳富蘇峰（1935）「国民必読の書」『報知新聞』  
中村孤月（1969）「中村星湖論」『明治文学全集 水野葉舟・中村星湖・三島霜川・上司小剣集』、東京、筑摩書房  
中村武羅夫（1969）『明治大正の文学者』、東京、中央公論  
法政大学百年史編纂委員会編（1980）『法政大学百年史』、東京、法政大学  
宗像和重（2022）「解説—純粹無垢の一行」『運命』、東京、岩波書店  
山形敏貴（2023）「編集後記」『資料と研究』(28)、東京、研究と資料の会

## 付記

引用は原則として旧漢字は新字体に改め、仮名遣いは原文のままとした。ルビは適宜省略し、「／」で改行を示した。原稿の翻字に当たっては、その一部に文脈に基づく推測に拠った箇所がある。

なお、原稿の公表をご許可くださった著作権継承者の山田美那子氏に御礼申し上げます。また、資料の閲覧・撮影にあたりお世話になった、山梨県立文学館の皆様にも感謝申し上げます。

本論文は 2019 年度「台湾日本語・日本文学研究国際シンポジウム」(2019 年 12 月 14 日、於東呉大学)における口頭発表を元に大幅加筆修正したものである。席上にて貴重な助言を頂いた方々に厚く御礼申し上げます。

本研究為中華民國國科會研究計畫【自然主義於大正時代的轉變—以中村星湖為探討核心】(107-2410-H-032-013-)及【中村星湖與葛西善藏：日本大正時期的「角色原型」問題】(NSTC112-2410-H-032-022)研究成果之一部份。